

景観フォーラム

巻頭言

世界が新型コロナウイルス禍に陥ってからすでに2年目の夏になりました。100年前のスペイン風邪が終息するのに2年以上かかったということは承知しながら、2年目になるこのような状態は耐え難いものを感じざるを得ません。この怒りをどこに持ってゆこうかと考えはするのですが、常識では持ってゆこうとする場所がないことに愕然とせざるを得ない今日の頃です。ワクチンがせめてもの救いと思いますが、すべての人が接種できるのにはこれもまた途轍もない時間がかかりそうです。

常識ではとてもこの災害には勝てそうもありません。「常識」という基準を拭い去るしかないというのが、このコロナ禍における常識ということになるのかもしれませんが、それではどのように考えるか。先ず、このコロナには時間というものはありません。2年ぐらいたったら去ってゆくのではないか、まあ時間がたてばこの災害というものは消えてなくなるさ、という私たちがよく使う常識は通用しません。コロナには1年も2年も関係がないのです。1年も100年も同じレベルで考えた方がいいのかもしれませんが。

さて、私たちが常識の基準に用いている5W1Hはこのコロナにとってはどうでしょうか。先ず、いつ? Whenですが、いつコロナ禍に罹ってもそれを避けようがありません。そして、どこで? Whereですが、コロナはどこでも存在しているようですが人間がたくさん集まりそうなところに多くいそうです。次に、何が? Whatですが、コロナウィルスに決まっているわけですが相手が目に見えないものですからこれもなかなか判別しがたいでしょう。誰に? Whoということはコロナ菌を持っていそうな人ということになります。何故? Whyと言われてもどうしようもありません。地球温暖化か? 近年のグローバリゼーションか? 100年前のスペイン風邪のようにこの災いが過ぎたらもう100年は来ないだろうという人と、否、毎年来るかもしれないという人もいます。そして、最後にどのように? Howに対する答えはいろいろありそうで答えられない要素は多そうです。というのも、この問いに答えるにはやはり科学的根拠が必要だからです。どのようにこの手の災いが生じ人類を苦しめるのかという根源的問いかけに通ずるからです。

ところで、このコロナ禍を忘れるためにも、私達がすべきことは少なくとも2か月に一回は「景観まちあるき」を実施いたしましょう。この前、コロナ君にお会いしたら我々コロナにはそういう楽しみはないので我々に代わってそれは是非ともやってくださいと言っておりました。呵々

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2021 年度年間スケジュール>

*2021年度とは2021年4月1日⇒2022年3月31日のことです。

2021年

- 4月20日(火) 於ネット会議 **第1回景観研究会** (コロナ禍の景観1)
- 5月25日(火) 於ネット会議 **第2回景観研究会** (コロナ禍の景観2)
- 6月29日(火) 第1回理事会 於ネット会議 **第3回景観研究会** (コロナ禍の景観3)
- 7月31日(土) **第1回景観まちあるき** (企画中)
- 8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9月28日(火) **第4回景観研究会** (コロナ禍の景観4) 於 JICA 研究所
- 10月23日(土) **第2回景観まちあるき** (東京都神保町)
- 11月25日(木) 第2回理事会・**第5回景観研究会** 於 JICA 研究所
- 12月16日(木) 忘年会(某所の居酒屋)

2022年

- 1月22日(土) **第3回景観まちあるき** (企画中)
- 2月17日(木) **第6回景観研究会** 於 JICA 研究所
- 3月26日(土) **第4回景観まちあるき** (企画中)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

遊悠散歩・日々雑感③ -生まれ変わった東急池上線「池上駅」を見て-

野田路人

今年(2021年)3月に、ローカル線の東急池上線の「池上駅」が橋上駅ビルに生まれ変わり、この地で初めての複合型商業ビが誕生したのをきっかけに、関連する背景等を改めて順を追って整理してみました。

「大田区」・・・

大田区は1967年以降、東京湾の埋め立てにより平和島、昭和島、京浜島など次々に人工島を造成し、区域を拡大してきました。1992年に完了した羽田空港沖合理め立て工事で世田谷区を上回り23区最大の面積を持つ区となりました。(この拡張により区の総面積の約4分の1を羽田空港が占める様になりました。)



東京23区の中で都心から最も遠くに位置し、23区で唯一都心15km圏に分類されています。区の中央に位置する平地部は市街地が広がり、ビルやマンションが立ち並び、京浜工業地帯のものづくりの町工場も多くあります。東から西に向かって高くなり、区の西側は丘陵部となり、小規模アパートや民家が混在しています。標高の最高点は約42.5mで名称を持つ坂が約50もあります。

「池上本門寺」・・・

区の中央、丘陵部が始まる位置に「池上本門寺」があります。ここは区内でも希少となる緑が残る場所です。

「池上本門寺」は、鎌倉時代に日蓮上人が病氣療養の為常陸国へ旅する途中、武蔵国池上郷(現・大田区池上)の池上邸に滞在し入滅し、入滅後作った日蓮の御影像を安置したのが「池上本門寺」で、池上宗仲は法華經の字数(69,384)に合わせ館やその周辺の土地6万9,384坪を寺領として寄進しました。この寄進地が「池上本門寺」の基礎となっています。



鎌倉・室町時代を通じ関東武士の庇護を受け、近世に入ってから紀伊徳川家等諸侯の祈願寺として栄え、表参道96段の石段は慶長年間に加藤清正が寄進したと伝えられています。境内には大堂をはじめ、多くの堂宇(どうう)が点在していますが、第二次世界大戦の空襲での焼失を免れた、五重塔(1608年建立※国の重要文化財)、総門(元禄年間建立、※扁額は本阿弥光悦の筆)、経蔵(1784年建立)、宝塔(1828年再建※重要文化財)、経蔵(1784年建立)、宝塔(1828年再建※国の重要文化財)を除き、戦後順次復興したものです。



「池上」・・・

「池上本門寺」のある「池上」は多くのお寺も点在し、門前町として発展してきました。

「池上」の地名の由来は諸説あり、元の地名は「池亀」で、かつてこの一帯は湿地で池が多く、池に亀が多く住んでいた事が由来で、その後「池上」に改められた説。洗足池(千束池)が本門寺のふもとまであり、その周辺の村であったから、また蓮沼(池)の上部に位置する地域型「池上」と名づけられたとする地形説と鎌倉時代の当時の領主・池上右衛門太夫宗仲の姓から名づけられたとする姓氏説があります。

「東急池上線」・・・

池上本門寺参詣客の輸送を目的に1922年(大正11年)に蒲田駅-池上駅(1,8km)を池上電気鉄道により開業、現存する東急電鉄の鉄道路線では最も早く開業した区間です。

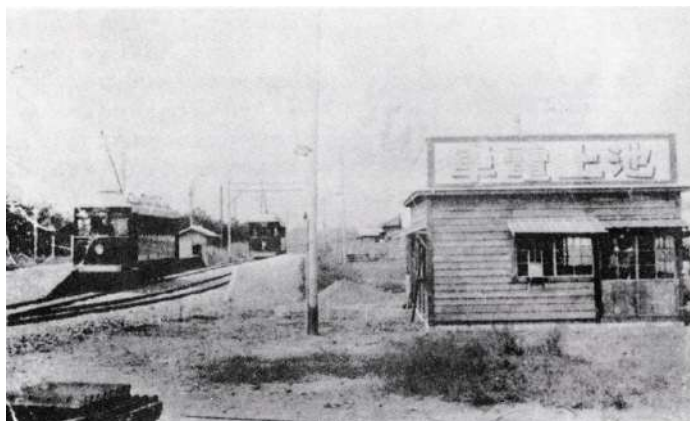


JR 蒲田駅(大田区)と JR 五反田駅(品川区)

間約11Kmを結ぶ、「東急池上線」は現在3両編成電車が600mから1km間隔の15の駅を走り、蒲田駅と五反田駅以外では旗の台駅で東急大井町線に乗り換えができる地元の足として走るローカル線ですが・・・1976年(昭和51年)には池上線を舞台にした歌『池上線』(唄:西島三重子)が大ヒットし、その名が日本全国に広がりました。

「東急線 池上駅」・・・

1922年(大正11年)に蒲田駅-池上駅で開業した池上駅は主に池上本門寺参拝客用でしたが、その後大田区の中央に位置する利便性から路線バスの乗換駅として、1番～5番規模の駅前ロータリーが作られました。開業以来100年近く使われた平屋木造の駅舎で、東急で唯一逆方向につく電車のホームに移動する為の構内踏切の有るレトロ感満載でしたが、2018年に仮駅舎に移行し、2020年7月に地上階建ての橋上駅舎に生まれ変わり、供用開始と共に、構内踏切が廃止され、翌年(2021年)の3月に商業施設「etomo 池上」が開業しました。



池上電気鉄道時代の池上

「変わる駅舎と周辺」・・・

■旧駅舎：2012年頃

・改札を抜け構内踏切を渡り反側のホームに入ります。



■仮駅舎：2018年～

・約2年間仮囲いの中で工事進行



■2020年7月橋上駅舎供用始

・ロータリー中央の駅前交番は仮囲いされ撤去され新ビル1階に移転しました。



■2021年3月商業施設(etomo 池上)開業

・交番の無いロータリーになりましたが、最近仮囲いがされ、路線バスの施設用か、交番の跡地に施設の骨組みが姿を現して来ました。



「商業施設 etomo 池上」・・・

橋上駅舎の為、エスカレーターで2階上がり、店舗街を通り抜けると改札口となります。



建物内部

- ・2階：改札口・店舗街
- ・3階：東急ストアー



・4階「区立池上図書館」

長年別の場所にあった図書館が移転、隣接のスターバックで読書が出来、館内に蓋付きなら、飲み物の持ち込みも出来る OPEN な明るい感じの新しいタイプの図書館に生まれ変わりました。



・4階からの景色

駅前の路上からは見えなかった「池上本門寺」の本堂の屋根や五重塔がうっそうとした木々の中に見る事が出来ます。

おそらく、高いビルのない時代には駅からお寺が見えたと推察します。

足元をゆっくり行き交う電車を眺めて楽しむこともできます。



「変わる町並みに思う」・・・

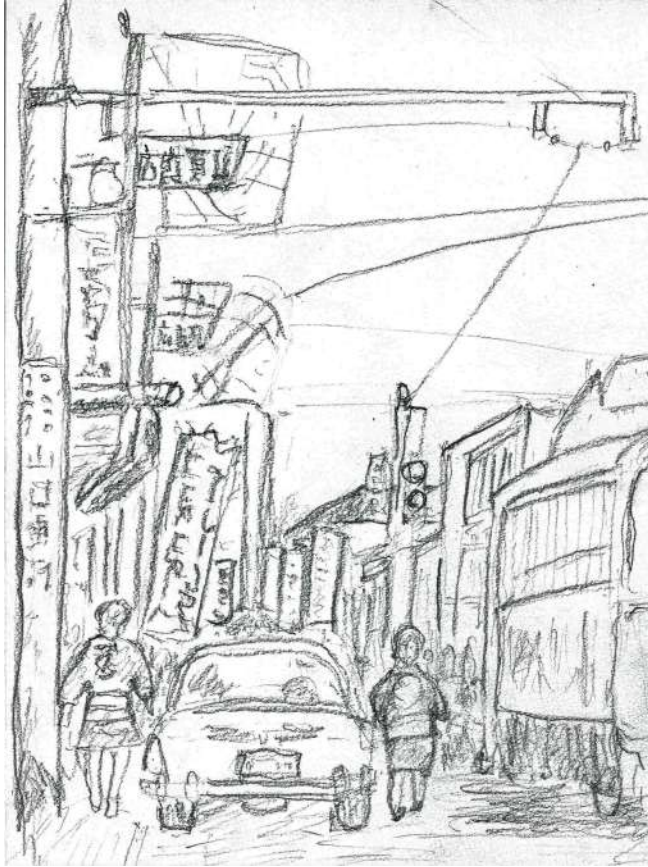
池上線の駅舎が高層化すると想像すること無く、建て替わった新駅舎を見て、何十年と変わらず見続け、変わらないと思っていた風景も、時代と共に変化していくことを実感しました。今回、会報原稿作成の為、改めて新駅舎ビルの外観・内観を見ると、あまり駅舎の機能一辺倒の箱物ビルではなく、



外装の色や窓配置など街並みに同化する工夫と共に、1階から2階へのエスカレータ部分の大きく開かれた吹き抜け、内部通路等共用部に温もりを感じる木質系材料や本門寺を意識したパターンデザインの壁面などパブリック施設としての工夫を感じ、蒲田駅寄り隣の平屋建て「蓮沼駅」と橋上駅舎となった「池上駅」を見比べると新しい景観の一步と感じました。

古民家カフェの魅力 -テレビ番組から-

豊村泰彦 (文と絵)



■カフェと喫茶店

最近、私が街の中で気になってる場所はカフェである。私たち昭和世代はカフェと喫茶店は同じものとしてとらえがちなが、少し違うようだ。喫茶店は、コーヒーや紅茶、ジュース、ケーキなどを出すお店で、カフェはそれらに加えて、アルコール飲料やカレーライスやナポリタンなどの軽食類を出す店として区別しているようだ。しかし実際のカフェは、飲食だけでなくもっと広い概念を取り込んだ個性あふれる交流スポットとして観光や地域活性化にも貢献している。

例えば、本を読んだり、購入したりできるブックカフェ。足湯、マッサージなどリラクゼーションの環境を整えたカフェ。手芸や工芸などのもの作りが体験できるカフェなど種類も形態も多様である。そのようなカフェはお店がお客に専ら飲食と居場所を提供するのではなく人と人の交流、新たな物や情報との出会いを生むことがカフェの最大の特徴となっている。街には実にいろいろなかフェがあるが、中でも今私が最も興味を引かれるのが古民家カフェである。

■古民家カフェ

「古民家カフェ」に定まった定義があるわけではないが、一般に古い日本建築を改造してカフェとして開業しているお店をそう呼んでいる。木造のレトロな雰囲気が漂う店内でゆったりした時間を楽しむことができるのがこのカフェの特徴で、都心から郊外まで全国いたるところにあるようだ。おそらく今ブームになっているのだろう。テレビでも古民家カフェを紹介する番組を時々やっている。中でもお薦めなのは定期番組の「ふるカフェ系ハルさんの休日」。ハルさんという一見オタクっぽい青年が毎回全国にある古民家カフェを訪問して、地元でとれた食材を使った料理を味わったり、カフェの経営者に話を聞いたり、地元の住民と交流する。

7月4日に放送された番組では、千葉県南長南町にある里山の古民家カフェが取り上げられた。長屋門のある屋敷風の日本家屋で、そこでは地元の野菜を使った季節感豊かな料理がふるまわれ、贅沢な時間を過ごすことができる、夫婦二人で切り盛りしているので、お客は1日6組限定となっている。これはこれで採算は取れているのだろうが、儲けることが目的だったら割に合わない商売だ。利益基盤が脆弱でもあえてこのようなカフェを開店するというのは、経営者自身が古民家家屋を中心とする伝統的な環境や地元の食材を使った手作りの味をいろいろの人に味わってほしい、「食」を通して人とつながりたいという目的があるからなのだろう。

■古民家の力

歴史的な日本家屋と同様、伝統的な技法によって建てられた建築物はそれ自体に魅力のある存在だ。その価値に賛同する多くの人々がもっと身近に、普段の生活の一場面の中で古民家の感触を味わいたいという欲求は、多くの日本人が持つ自然な感性だと思う。しかし、古民家といってもその多くは個人の所有であったり、文化遺産のように保存の対象になっていて、見学が許可されたものでない限り中に入ったり触ったりすることはできないし、まして中で飲食はできない。古民家カフェは伝統建築を身近に感じるための施設であり装置である。カフェという店の看板が掲げることによって、垣根が取り除かれ、誰でも古民家に足を踏み入れることができるのである。それが、古民家カフェが注目を集めている大きな理由なのではないだろうか。



もう一つ例を挙げる。6月4日の「ふるカフェ…」では埼玉県川越市のカフェが取り上げられた。川越という蔵造の街並み風情から小江戸と言われるが、この番組で取り上げられたのは、裏道にひっそり佇む7軒続きの長屋の一角を改造したカフェであった。ここは、弁天横丁と言い、戦前は花街として栄えていたが、戦後飲食店街に変わり、最近では閉店する店も増えだした。そこへ3年前に大工をしていた現在のカフェのオーナーが仕事場として借りたのをきっかけにギャラリーカフェに改造し、オープンしたのだ。ここはもともとは芸者さんの置屋だったところで、古風なすりガラスや場所によって色を変える漆喰壁など伝統を残しながら改装しており、昭和の時代の名残が感じられる貴重な歴史資料にもなっている。

長屋というのは現在のライフスタイルからはかけ離れたところにあるが、カフェとして蘇ることで、もっと身近なものに感じられるようになり、昔の暮らしも捨てたものではないと思えてくる。それこそ古民家の持つ力である。

■見逃さないように

この「ふるカフェ…」はNHKのEテレ毎週木曜日午後10時30分から11時、再放送は毎週日曜日午後6時30分からで、どちらも実に見逃しやすい時間帯である。こういう中途半端な時間帯の設定はNHKだからで、これでは不定期番組とあまり変わらない。不定期番組といえば、「六角精児の呑み鉄本線日本旅」もキャッチするのが大変である。この番組はご存じの方も多と思うが、俳優の六角さんが「酒と鉄道」というテーマで日本国中を旅する番組で、ご自身のバンドの歌や好きな曲が流れる中、列車の中や景観スポットで缶ビールやワンカップをうまそうに飲むシーンが一番の観どころだ。鉄道操車場が好きで古い車両見て感激している様子は鉄道マニアに受けているようだ。六角さんの歌うブルースっぽい曲も番組を盛り上げていて、個人的には「吉田類の酒場放浪記」とともに名番組だと思っている。

話は脱線したが、「ふるカフェ…」は古民家ファンだけでなく景観に関心のある人にもぜひ覗いていただきたい番組である。



<LFJブックレビュー 72>

『日本の歴史的建造物』

光井渉著

2021年2月刊 中公新書

斉藤全彦

「歴史的」という形容詞を用いるとき、われわれの念頭にあるものは何であろうか。先ず第一に、過去にあった物・事などである。現在から見た時に現在進行形から外れた物・事ということになる。次に言えることは、過去を決定づけた、記憶に残るものとした物・事とである。そして最後に最も重要な事柄は、この歴史的ということから意味することは、現在にも影響を及ぼし得る物・事として人口に膾炙していることであろう。時間はとどまることを知らない。従って歴史は常に創造されつつあると言えよう。

以上の論理からすると歴史的建造物と称されるものは時間の経過とともに常に新たに作られつつある。しかし、日本においては、「中世までの社会にあって、建造物の古さに特別な価値が見出されていたとは言えない」と著者は言い「建造物の古さを肯定的に捉えて、意図的にその形態を維持しようとする感覚が出現したのは、戦国期から江戸時代に向かう時期であろう」と指摘する。そして「歴史的建造物の価値や魅力は、不変で絶対的なものではない」と示すことでこの歴史的という言葉の危うさも忘れてはならないとする。さて、その内容は以下のようになる。

第1章では「歴史の発見」とし、日本には、法隆寺など世界最古の木造建築物が存在し、「奈良時代、八世紀まで遡る建造物の総数は28棟にも及んでいる」という。そして、中世における茶室に見られるように「古さの尊重と相通じる美意識を確認できる」とする。

第2章「古社寺の保存」では、「歴史的建造物の保存という思想が、最初に対象としたのは社寺建造物であった」とし、江戸時代の仏教教団の統制として本末制・寺檀制を基軸にして「寺院の仏教的な要素と神社の神道的な要素が一つの空間に同居するのは普通のことであった」とする。寺院と神社がいかに共存できたか、またそれが明治時代になり如何に存続が危うくなったかを説く。

第3章「修理と復元－社寺」では、木造建築の神社と寺院をいかに存続させるかという問題に対して、「百年から二百年に一度行われる根本修理」として、解体修理・半解体修理などの手法を用いる。著者は日光東照宮などの事例から説明する。

第4章「保存と再現－城郭」では、1873年には廃城令が出され全国では200以上が該当し、多くの国宝級の城郭が消滅させられたが、「戦前の段階で現存していた天守19棟は全て国宝に指定された」という。しかし保存と修繕には多くの知識と財源を必要とする。その補完として、1919年には史跡名勝天然記念物保存法が制定される。

第5章「保存と活用－民家・近代建築」では「日本近代において歴史的建造物の破壊が最も急速に進行した時期は明治維新时期ではなく、昭和の戦中戦後期であろう」という推察から、明治大正期の洋風建築の保存と活用が必須事項となった。

第6章「点から面へ－古都・街並み・都市」では建築物から面としての存在として、古都は当然のこと「風致地区」から「まちづくり」の概念が実践の場として立ち上がる。(斉藤全彦)



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

